

小学校外国語科授業に絵本を取り入れる効果

— 帯活動としての担任教師による読み聞かせ —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 丸山 真知子

1. 研究の背景

小学校では2020年度から新学習指導要領が施行され、3年生及び4年生ではこれまで5年生と6年生で行われてきた「外国語活動」が、そして、5年生及び6年生では「外国語科」の授業が行われている。高学年では、聞くことや話すことに加えて、読むことと書くことも目標とする教科が設置された。この高学年の外国語科の変化については、特に、4技能の獲得を目指す中学校のような教科としての英語のイメージを持つ教員も多いだろう。しかし、教科になったからといって、中学校の前倒し的なイメージで授業を行うことは、これまで培ってきた音声中心からはじまる小学校で行うべき英語教育の流れを断ち切ることになってしまう恐れもある。高学年担任だけが学ぶということではなく、どのような教材を使用し、どのような方法で何を指導していけばよいかを学校全体で考えていく必要がある。

1-1. 学習指導要領の比較から

外国語科は、校種間の連携が重要となる教科である。小学校段階ではどのようなことをねらい、どのような力をつけ中学校へ送り出せばいいのか、校種ごとの目標を並べ比較した(図1)。どの校種においても、言語活動を通してという文言が書かれており、実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動が核になっていることがわかる。小学校では「コミュニケーションを図る素地」・「コミュニケーションを図る基礎」となる資質・能力を育成することを目指している。

外国語におけるコミュニケーションとはどのようなものか。「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」では、「外国語で表現し、伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とある。場面や状況を設定する例として、I like～. という表現を習得した児童に対し、What food do you like?と質問するのではなく、What food do you like in summer?と問い、場面を考えさせることや、日本のお土産を紹介する活動では「日本を初めて訪れた外国人に」「その人は日本の伝統文化に関心がある」と条件をしぼった課題を与えること等がある。どのような内容を伝えるべきかを思考し、表現(言い方)を工夫する必要性が生じるような問い方を通し、相手のことを想像して聞く、自分事として答えることができる力がもとめられる。

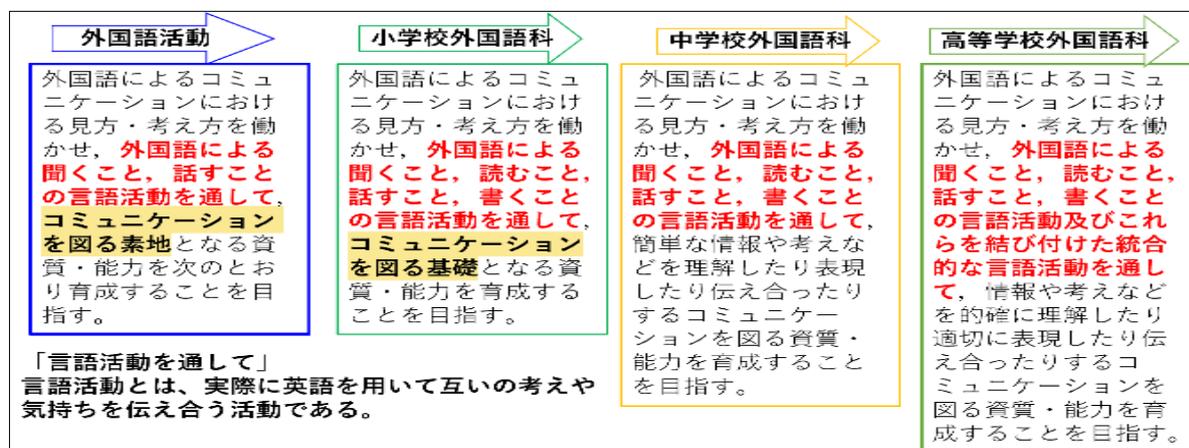


図1：学習指導要領における校種ごとの目標比較

1-2. 担任が授業をするということ

小学校における外国語の授業担当者は、専科教員の配置も一定数あるが、ほとんどの場合学級担任が授業を行っている。令和5年度英語教育実施状況調査(小学校)によると、英語教育担当教員延べ163,475人のうち学級担任は88,439人であり、学年間の交換授業を合わせると104,956人の担任教員が外国語の授業を行っていることが示された。一方、小学校教員の英語免許所有者はごくわずかであり、英語能力に関する外部試験CEFR B2相当以上(英検準1級以上など)を取得している教員についても極めて少数である。また、小学校教員養成課程において英語指導に関する科目の習得が義務づけられたのは2019年度以降であり、小学校教員の多くは外国語を教えたこともなければ大学の教育課程で指導法を学んでもいないことになる。日本の小学校英語は、学級担任が中心に指導にあたることを前提としてきた。総合学習の一環だった時期、外国語活動導入の時期だけでなく、教科としてスタートした現在も学級担任主導は継続する。こうした位置づけが、担任の英語指導力に関わる問題、教員負担の問題にも直結した(寺沢2020)との指摘にもあるように、小学校教員にとって英語の授業を担当することは高いハードルとなり、指導書やALTに大きく頼らざるを得ない現状があるのだろう。

1-3. 教科書の改訂

教科用図書(以下、教科書)が改訂され、令和6年度より公立小学校では新しい教科書を使用している。小学5・6年生が使う外国語科の教科書は、外国語科が2020年に教科化されて以降、初めての改訂である。各社、主体的な学びを大切にしていることや、興味関心を引き出す工夫やしかけを盛り込んでいること、目標、ゴール、そして評価まで、児童も教師も見通しをもちやすい構成になっていることが共通している。他にも多文化・異文化理解の教材も豊富に含まれているのもポイントである。新旧の教科書を比較することで、どのように授業を組み立てていけばいいのか、英語を教えたことのない教員にとっても今回の教科書改訂は教材研究の幅が一気に広がるきっかけになるであろう。

その中で、互いの考えや気持ちを伝え合う言語活動の充実を特色としている光村図書の「Here We Go!2」について着目する。巻末に「学習を助ける資料」として、「おすすめの絵本」というページが登場した。

「絵をたよりに、物語の展開を楽しむことができるよ」という説明とともに、物語の種類ごとに分けられた8冊の絵本が紹介されている。外国語活動・外国語科ガイドブックの中でも、絵本は児童に良質なインプットを与えるために効果的な教材であり、授業で積極的に扱うとよいと書かれている。また、長田(2018)は、第二言語習得において重要とされるインプットの量を確保する手段の一つとして、かつ、文脈の中で言語にふれる機会を与える教材として、2020年に完全施行される指導要領では「読む」素材である絵本の活用が可能性を広げると述べている。これらのことから、英語の授業の中に絵本を取り入れることに注目した。

1-4. 外国語絵本の活用について

英語絵本を活用することについて、松井(2019)は、教材としての絵本は英語のリーディング能力を養うものとして有用な教材となりうる。絵本の中でよく繰り返される語彙や表現を何度も聞くことで、音声に十分慣れ親しむことに加えて意味がわかるようになる。また、適切な絵本選定を行えば、目的や場所に合った言語使用を身に付けさせることができると実践研究の中で述べている。また、長田(2018)は、英語の絵本の語彙はほぼ1,000~2,000語レベルでできているものが多いが、子供たちはすべての語がわかるはずもなく、絵を手掛かりにし、指導者とのやりとり(インタラクション)を通して理解を深める必要があると考える。また、絵本に出てくる様々な言語使用場面に触れ世界を広げることができる、と絵本の活用を薦めている。松浦(2012)は、英語絵本がもたらす効果は、興味・関心の向上、聞く力の育成だけに限らない。小学校と中学校の英語教育の円滑な接続を図る点でも有効とらえる。しかし、英語絵本はまだ教材としての地位は低く、読み聞かせとして取り扱われる頻度も少ないと今後の展望を述べている。

教師側の視点として、吉村（2017）は、小学校英語はコミュニケーション能力の育成を中心としているので、専科教員やALTだけに任せるのではなく、児童の実態を把握している学級担任が授業を行うことがもとめられている。しかし「自分の英語力に自信がない」と悩む教員は多い。教師自身の英語力・指導力を向上させるためにも、英語絵本の読み聞かせは有効であると述べている。読み聞かせについては、「Hi Hi, friends! 2 指導編」（文部科学省）の中でも、コミュニケーションは相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて話していることがわかる体験を児童にたくさんさせ、児童自らが「話す」ようになることが大切である。その工夫の一つとして絵本の読み聞かせがあると述べている。

2. 研究の目的

先行研究から、「絵本を活用すれば〇〇力がつく」と、児童にとっても教師にとってもメリットがあることが示唆された。しかし、先行研究では中学年の実践が多い点、専科教員の研究が多い点から、「教科化された高学年において担任が授業を行う」という新たな視点で絵本の活用に迫る可能性を考えた。絵本は低学年の児童が好むものと思われがちだが、高学年の児童の反応を見取り、そして、担任が無理なく継続的に取り組める方法として、読み聞かせを用い、小学校外国語科において有用な教材となるかを探りたい。

3. 研究の方法

(1) 読み聞かせによる児童の反応や実習校の英語担当教員のインタビューから、高学年児童への効果を検討すること

(2) 読み聞かせ後の児童の記述から、高学年児童がもつ絵本へのイメージを分析すること

(3) 対象児童

山梨県内の公立小学校 6 年生 36 名

(4) 研究実施日

令和 5 年 9 月 11、13、18、20、25、27 日

(5) 対象児童事前アンケート 【外国語の本を読んだことはありますか はい 10 人 いいえ 26 人】

絵本の選書については、絵本のテーマや言語的に難しい、発達段階に合わないものを選んでしまうと児童は興味をなくしてしまう可能性があるとして選書の重要性を報告している実践がある中で、松本（2017）は、文部科学省が外国語活動において求めている絵本の条件と、第二言語習得におけるインプットとしての絵本に求められている条件を加味した 10 の選定条件（試案）を以下のように示している。英語絵本の読み聞かせ初心者である筆者は、話の展開がシンプルであること、授業で扱う表現に沿うことを中心に、この選定条件に合う絵本、教科書で紹介されている絵本から選書を行った。また、特別な日の読み聞かせではなく、日常の授業内に溶け込むデザインにするために 1 ユニット全ての授業において授業開始後 5 分間の中で実践を行うことにした。

- | | |
|---------------------|--------------------------|
| ①絵本の長さ | ②英語が平易であること |
| ③英語に特徴的な音声やリズムがあること | ④絵本作品として優れていること |
| ⑤遊びの要素があること | ⑥他教科との融合をしやすいこと |
| ⑦児童参加がしやすいこと | ⑧物語構造が繰り返し、または起承転結型であること |
| ⑨テーマを持つこと | ⑩主人公、登場人物の設定が魅力的であること |

4. 読み聞かせの実践

4-1. 児童の反応と教師の考察

児童の反応

担任とのやりとり

工夫

題名・選書の理由・○絵本選定条件との関連	児童の反応	教師考察
<p>1 The Goldfish Got Away</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Whereの繰り返し ・逃げてしまった金魚を探すという単純な活動で展開される。 ・小さいころから馴染みのある本である。 <p>②③⑤</p>	<p>「教師：This? 児童：No./Yes. Right! / Left!」のやりとりがうまれ教師との掛け合いで進んだ。書画カメラで絵が色鮮やかに映し出され、ページをめくるたびに前のめりで集中して聞いていた。</p>	<p>表紙をつかい、金魚がゴールドフィッシュということをおさえてから本文に入った。短い話の本であったが、単語を教えようとしてしまう気持ちがある。</p>
<p>2 David Gets in Trouble</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書室にある本 ・字が大きく1ページに一文で構成されている。 ・過去形をつかっている。(授業内容) <p>⑨⑩</p>	<p>やんちゃな男の子の行動に「それはないでしょ～」と反応していたことや、最後にDadとMomの関係についても言及していたことから、内容を理解して聞いていたことがわかった。</p>	<p>NLTと声の抑揚まで打ち合わせをする必要があった。授業内容が過去形だったこともあり、知っている表現があったことや一文ずつでページが展開されていることも理解の深まりにつながったのだろう。</p>
<p>3 Yo! Yes?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で紹介されている ・登場人物が2人の物語。 ・左のページと右のページに言葉が1つか2つずつ出てくるシンプルな構図である。 <p>③⑧</p>	<p>登場人物の表情や字の大きさに合わせて声色をかえ、自然発生的に教師とのかけあいが始まった。ある児童が「結局どういうことになるの?」と発言すると「だから! 初めて出会った2人が友達になっていくという深い話じゃん!」と別の児童が感想を伝えていた。</p>	<p>専科の先生の感想「子供たちが初めてのものに対して、あんなに読めるなんて思わなかった!」「まるで演じているようで、本の世界に入り込んでいる姿がよくわかった。」「やりとりの中で内容を理解していくのかなあ。」</p>
<p>4 Ketchup On Your Cornflakes?</p> <ul style="list-style-type: none"> ・絵合わせのようなしかけ ・Do you like～?の繰り返し ・簡単な単語(名詞)で展開される。 <p>②⑤⑦</p>	<p>休み時間から戻ってきた児童が集まってきて「ケチャップとコーンフレーク?」「それはきらいだわ」「意外とうまいんじゃない?」と感想を話し始めた。 Do you like jam in your bed? 「食われちゃう!!」 Do you like ice cubes on your head? 「夏はいいね!」 Yes/No以外の反応が豊かに出てきた。</p>	<p>「みんなはどう思うかな。Yes/Noで答えてね。」と読み始める前に伝えようと考えていたのだが、表紙を読んだだけで「Yes/No」の反応が早速返ってきたので、そのまま本文に入ることにした。カードをめくり文章を成立させる活動(ゲーム)の予定があったので似たような活動のある本を選んだ。</p>
<p>5 THE HAPPY DAY</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書で紹介されている。 ・行動をあらわす単語が繰り返し登場する。 <p>④⑧</p>	<p>内容に対して自分の意見を話しているというより、聞いた英文を訳したつぶやきをしていることがわかった。わかりにくい動物や動詞もいくつか登場したが、訳さず絵を指さし、ジェスチャー等入れながらどんどん話を進めることにした。物語に少しずつ聞き入っている様子が見て取れた。</p>	<p>映した場面を見て「あ、りすがたくさんいる!」と反応があったので「りすってわかるの?」と尋ねると「うん、しっぽの毛が丸まって目がかわいい」「本当だーかわいい」と、白黒の小さな絵であったが細かい部分までよく見ていた。(りすという英単語が難しく、発音も心配な単語であったので絵が頼りになることがわかって安心)</p>
<p>6 From Head to Toe</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NEW HORIZON(教科書)で紹介されている。 ・動物を扱うunitの学習中であったため。 ・動作を表す絵が豊富である。 <p>⑦⑩</p>	<p>動作の単語が難しいページもあったが、ページをめくると文を聞く前に絵を見て体を動かしている様子も見られた。Sealのページで、clap my handsの動作は、胸の前で手を叩く普通の拍手ではなく、手を下へ下げて背筋を伸ばし、動物がする拍手の形を表していた。</p>	<p>動物の動作を真似するような児童の動きを引き出す本である。「Can you do it?」が誘い文句になり、児童はすぐに動きはじめた。ちょうど動物を扱う単元を学習していたのでタイムリーな本であると感じた。また、友達の動きが面白く、それを見て爆笑していたり、出てくる動物の鳴き声を真似したりしてクラス中が盛り上がった。</p>

4.2. 実習校の英語担当教員へのインタビュー

実習校は専科教員配置校であり、NLT（Native Language Teacher）と日本人専科教員がともに授業を行っている。英語教育については先進校であり、2人の先生方に筆者の読み聞かせの実践についての感想を伺った。

- ・中学生でも教科書のみでは聞き取ることができない。絵（具体物）を見て視覚的に理解につなげることは効果的である。
- ・学習中の表現に沿ったものは授業の導入効果抜群。
- ・ストーリーが全然ない本でも、先生とのやりとりがどんどんふくらんでいる。
- ・児童の反応を見ていたりきたり進めることのできるの担任の成せる技だろう。
- ・担任が英語を使うと児童はより聞き入る。それは担任への信頼度。
- ・ストーリー性のある話は、おちにつながる核となる単語をおさえたい。
- ・ストーリーの確認よりもクリアな声（抑揚、強弱）で、その単語のジェスチャーを入れる等が必要。
- ・ALTにはジェスチャーや効果音を入れてもらう等、TTでの役割分担が考えられる（図2）。

4.3. 読み聞かせの実践からわかったこと

6冊の読み聞かせを行った。児童の反応から、絵本は視覚的に理解できるもの、導入効果が期待できるものということがわかった。また、児童の実態を把握している担任だからこそ読み聞かせが児童に馴染み聞き取りやすく、担任の力が発揮されたこと、教師の技術としては読み方の工夫や教材提示装置の利用（図3）、ALTとの役割分担が効果的であることもわかった。児童の様子に合わせて読むスピードを変えたり、声色を変えたり、見せ方を工夫したりすることは小学校教師にとって得意なところである。担任が自信をもってT1となり、児童と英語を介してコミュニケーションができる教材になるとも考えられる。高学年でも十分に絵本を楽しめること、教師（担任）の発話が多くなったことが読み聞かせの実践から示唆された。



図2 ALTとの役割分担



図3 教材提示装置の利用

5. 児童アンケートより

5.1. 本の種類による児童の感想のちが

THE HAPPY DAY		<ul style="list-style-type: none"> ・読むのが難しいけど読んでみたいと思えた。 ・つぎはどのようなことが起こるか考えた ・英語だとしっかりした言葉はわからないけど、白黒の絵でも伝わった。 ・長い物語の間に、こんな感じで冬眠するんだといろいろ考えた。
児童の回答	件数	
物語や内容	12	
動物・冬眠に関する学び	11	
絵の印象	6	
感情の変化	6	
英語の学習	5	

From Head to Toe		<ul style="list-style-type: none"> ・動物の真似をしている人間の絵が面白い。 ・動いて変身するから次のページが待ち遠しかった。 ・動物の様子を実際に体をつかって真似できて楽しかった。会話がシンプル。 ・絵がカラフルで、思わず体が動いた。
児童の回答	件数	
真似・体の動き	13	
絵の印象	10	
内容	6	
面白さ・物語の進行	5	
英語の学習	5	

白黒の絵で展開されたストーリーのある絵本と、カラフルでテンポよく読み進められる本との比較を行った。いずれにも「想像して聞いた」「想像してやってみた」という感想が挙げられた。また、それぞれの本の特徴を捉えた感想が書かれていることから、訳さなくても意味の理解ができ、本の世界に入り込んで聞いていたことがわかった。



図4
読み聞かせの様子

5-2. 外国語絵本に対する児童がもつイメージ

読み聞かせの後、児童にアンケートを行った。児童の生の声をたくさん拾いたいと考え、質問項目を設けず全て自由記述とした。外国語絵本に対する児童の感想をカテゴリーに分け分析した（図5）。

児童の回答	件数
絵本を通じた理解・学び	9
英語学習の方法	7
英語の楽しさ	6
英語学習への意欲	6
文化や表現の違い	5
絵本への興味	3
クラスの雰囲気	3

図5 児童の回答（複数回答あり）

高学年の児童が持つ絵本のイメージとして、「勉強に役立つもの」「楽しく覚えられるもの」という学習につながるものだというイメージが多くあげられた。

- ・たくさんの英語を知った。
- ・英語を聞きながら読むと、物語を楽しんで英語の勉強ができた。
- ・本で色々な英語を知れるし、絵があると楽しく覚えられる。
- ・ちょっとだけど英語が読めるようになってうれしい。
- ・英語はあまりわからないけれど、絵で勉強ができてよかった。
- ・楽しみながら英語を学ぶことができる。
- ・聞いているうちに英語での勉強になる。
- ・文字が少ないと英語の練習になる。

「外国への気づき」「友達と笑い合える」という他者との関わりについての記述も目立った。

- ・外国と日本の話し方や表現がぜんぜんちがうことがあって面白い。
- ・外国の人たちはおもしろい想像力をもっていることを知った。発想も意外だった。
- ・6年生でも笑えた。迷路の本とか読んでみたい。
- ・NOやYESなど、自分たちで言ったり探したりできた。集中して聞けた。
- ・本の特徴がそれぞれあって聞くだけで面白かった。
- ・外国の話題が日本では見ない話題だった。

「できないと思っていたけれどできた」「想像して聞いた」「教師とのやりとり」について、読み聞かせの最中に感じたことに関する記述も多く寄せられた。

- ・普通の本より英語の絵本の方が面白い。話を聞きながら英語が聞けてよかった。
- ・聞いているだけで楽しい気持ちになった。ただ yes,you とか言っているだけでも楽しい。
- ・先生が「これはなんでしょう」とか私たちに呼びかけてくれた。そうするとみんながなんだろう、そうだねと盛り上がりたりするからそれがすごくよかった。
- ・英語の本は、読めないしわからないと思っていた。でもよめる本もあるし、英語の授業の中で読んでくれると習ったことをいかせるので楽しく読める。
- ・文字は少ないけれど、登場人物が何をしているのかがわかる。
- ・絵がカラフルで、英語がわからなくても、その意味を知ろうとするのが楽しい。
- ・英語で読めないところは先生がジェスチャーしたり音でヒントをくれたりして簡単だと思った。
- ・絵をみて内容がわかり、英語が読めたような気がした。
- ・英語の絵本を見たり読んだりしたことがなかったから楽しかった。絵が大きくあれば英語が苦手でもわかりやすい。

5-3.考察

高学年がもつ外国語絵本のイメージとして「勉強に役立つもの」「楽しく覚えられるもの」「外国への気づき」「友達と笑い合える」「できないと思っていたけれどできた」「想像して聞いた」「教師とのやりとり」が挙げられた。これは、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方で狙っていることに沿うのではないだろうか。また、6年生の教科書（Here We Go! 2）では「やってみよう。まちがいをおそれずに。」というテーマが掲げられている。「言葉の学習には時間がかかります。だれもまちがいをしながら言葉の使い方を理解していきます。たくさんのまちがいの中から、たくさんの発見をして、たくさんの喜びを味わいながら英語でできることを増やしていきましょう。」というねらいに迫るものにもなっているのではないだろうか。

児童のアンケートより、高学年児童は担任による絵本の読み聞かせを肯定的に捉えていること、絵本の読み聞かせは有用な教材になることが示唆された。小学校外国語科では「やってみよう！」の種をまくこと、コミュニケーションの素地や基礎を耕し「やってみよう！」の芽を豊かにした児童を中学校へ送り出すことが重要である。

6.課題

読み聞かせを実施していくには十分な絵本の確保、指導側の意識改革、カリキュラムの整備が必要であるという松浦(2012)の指摘にもあるように、読み聞かせを実践していく上で改善していかなければならない課題もわかった。

絵本の確保について、学校の図書室に置いてある外国語の本は有名な絵本をそのまま翻訳したものが多く、そのため英文の内容も難しく、児童自ら読むことは困難である。借りる児童はほとんどいないとのことだ。実際、教科書巻末で紹介されている絵本は、山梨県立図書館や甲府市立図書館を経由して見つけたものが多い。教科書改訂に伴い、司書教諭との情報共有も重要である。

カリキュラムについては、「特別な日の読み聞かせ」的な扱いにならないよう、週2回の外国語科の中で絵本の活用を無理なく運用し、工夫が必要である。当該学年だけに任せるのではなく学校全体で取り組むべき課題となるだろう。

7. 参考・引用文献

- ・ Here We Go! 2 (2024) 光村図書
- ・ 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編」
- ・ 令和5年度 英語教育実施状況調査 文部科学省
- ・ 吉村美幸 吉田朋世 今井信義 福島安希子 (2017)「小学校における英語絵本の読み聞かせの研究～担任が無理なく取り組める手法を探る～」福井県教育研究所研究紀要 122号
- ・ 寺沢拓敬 (2020)「小学校英語のジレンマ」 岩波新書
- ・ 松井千代 (2019)「小学校外国語「読むこと」における英語絵本～教材としての価値と教材選定の視点の獲得～ 愛知淑徳大学特定研究課題
- ・ 松浦友里 (2012)「小学校外国語活動における英語絵本に関する実践研究」 岐阜大学カリキュラム開発研究
- ・ 長田恵理 (2018)「小学校外国語教育における絵本の活用」 國學院大學人間開発学研究 第9号
- ・ 松本由美 (2017)「小学校英語教育における英語絵本選定基準の試案－絵本リスト作成に向けて－」 玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要第10号, 7-16.